

ウィニフレッド・ワトソン作
最所篤子訳

ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

第一章 午前三時六分 三時四七分

ミス・ペティグールは夢遊病者のように階段のはじめの二、三段を登りました。足がふかふかのカーペットに沈みます。建物はしんと静まり返っていました。ほの暗い灯りが階段と廊下を照らしています。静けさのせいで物思いが深くなっています。ゆっくりと幸福感が薄れていきます。ぐらりとよろめき、足取りが重くなりました。おとぎ話の世界は消えてしまいました。ミス・ペティグールは真っ直ぐ前に目をすえて、不気味に迫ってくる恐怖の幻を見つめます。

晴れの一日は終わりました。素晴らしい日でしたが、やっぱり終わってしまったのです。本当の自分の姿がまたはつきりと蘇ってきました。ほんの少し前に、この階段をはじめて上ったときの自分、一文無しで、仕事もなく、心配性で、みっともない自分。それが本当のミス・ペティグールでした。今日一日、ミス・ラフォースにとって、ミス・ペティグールはいくらか風変わりで、ずいぶん面白い人間だったようでした。いろんな思い付きに大喜びしてくれました。けれど、ミス・ラフォースが最後にどんなふうに対応するか、ミス・ペティグールはよく分かっていたのです。

部屋に着いて、ミス・ラフォースに服を返します。古い服をまた身につけて、もとの自分に戻ります。なんとなくみすぼらしくて、うらぶれていて、しょぼくれた姿です。ミス・ラフォースはきつと居心地が悪くなって、ちよつと腹を立て、そしてこの邪魔者をどつやたらうまく追っ払えるかしらと考えるでしょう。

ミス・ペティグールはそれを考えると耐えられませんでした。それ以外ならどんなことでも構いません。どきどきしながら誓いを立てました。大急ぎで部屋に飛び込み、急いでいるふりをして、さつさと自分の服を着て、簡単にお礼を言っつて、すぐに部屋を出てくるのです。ミス・ラフォースの記憶の中の自分を、たとえ一分間だつて嫌な気分です汚してはなりません。

この勇敢な誓いを立てても、ミス・ペティグールの足取りはいっこうに早くなりませんでした。その反対に、だんだんゆっくりになり、恐ろしさで身体がすくんでしまつたの

と戦わなくてはなりませんでした。それに大家のポックノール夫人はもう部屋に入れてくれないでしょう。こんなとんでもない時間にポックノール夫人のドアをノックなんてできません。今晚、朝まで通りを歩いていなくてはならないでしょう。震えながら壁に寄りかかりました。

二、三秒のあいだパニックに陥ったあと、またゆっくりと階段を上り始めました。ミス・ラフォースの階です。もうおなじみのドアが見えます。あれは本当に今朝のことだったのかしら？ この知らないドアを見つけて、どきどきしながら、いったいどんなふうに迎えてもらえるのだろう、失敗したらどうしようかと心配しながら近づいたのは。こんな心配が無用でありますようにと祈りながら、そのあと起こることなんか夢にも想像していなかったのだわ。

(でも、もう終わり)とミス・ペティグルーは思いました。(人生最良の日だったわ。あたくしは本当に幸運だった。こんな日が一度も来ない人だっているんですもの。勇気を出さなくては)

終わりへの一歩を踏み出しました。ミス・ラフォースの絹のような毛皮のコートがまだミス・ペティグルーを包んでいます。でも、それは確かにあるけれど、心の中ではすでに消えていました。心の中で、ミス・ペティグルーは再び、あの古いツイードのコートを着、古ぼけたフェルトの帽子をかぶり、かかとのすりへった靴を履いていました。心の中で、ミス・ペティグルーは役立たずの家庭教師に戻りました。勇気もなければ、覇気もなければ、魅力もありません。どんな男性も本当のミス・ペティグルーをぜったいに好きになつたりしないでしょう。口説かれるのは楽しいゲームでした。男性は、女性がお世辞を言ってもらいたがっていることを知っていて、その望みを叶えてくれます。でも、自分たちの言葉に同じ気軽さで受け答えしてほしいと思っています。なんでもかんでも真面目に受け取ってしまったのは自分が馬鹿みたいに世慣れていないというだけのこと。もし、明日、本当の姿で現れたら、ブロムフィールド氏は一体全体俺はこの女と何のかかわりがあるんだろうと仰天して、どうやって礼儀正しく追っ払えるかと考えるでしょう。きつと、傷ついて、恥ずかしくていたたまれない気分です。座っていることになるでしょう。そんなことは耐えられません。二度とあの方に近づくわけにいきません。

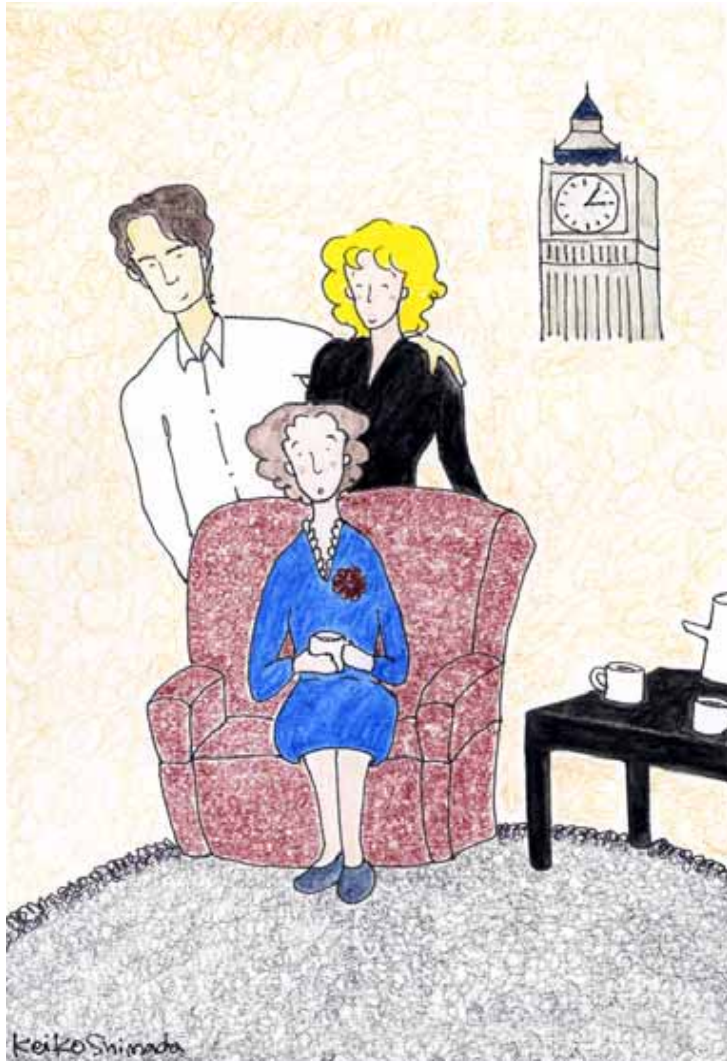
「だめ……だめだわ。ぜったいに」とミス・ペティグルーは自分に言い聞かせました。

「そうしたら少なくとも、あの方は今晚のあたくしを覚えていてくださるんだから」

ミス・ラフォースのドアの前で、秒針はかちかちと回っていきます。とてもベルを押してすべてを終わりにする気になれません。

(ずいぶん親切にしてくださいましたわ)とミス・ペティグルーは思いました。(あなたを困らせたりしませんわ)

ゆっくりと手を上げるとベルを押しました。中でベルが震える音を立てました。ちょっと間をおいて、ドアがさっと開きました。



島田圭子画

「グウイネヴィア」ミス・ラフォースが大きな声で言いました。「悪い子ね。すっか
だまされちゃったわ。いったいどこにいたの？ 迷子になったのかと思ってたわ。早く
入って。ジョーに誘惑されたの？ さ、一番おいしいところを話してちょうだい」
「あたくし急がな……」とそれでも決心を固めたミス・ペティグルーは弱々しく口を切
りました。でもそこに立っているミス・ラフォースは、相変わらず可愛らしく、はじめ
て会ったときよりもずっと幸せそうで、そしていかにも嬉しそうにミス・ペティグルー
を歓迎してくれるので、また弱い心が顔を出してしまいます。
「早く入って暖炉のそばにいらっしやいよ」とミス・ラフォースが命令します。「凍り
かけているじゃない。マイケル、その大きなお尻を暖炉の前から動かしてちょうだい」
ミス・ペティグルーは暖炉に引っぱっていかれました。マイケルがひよいと立ち上が
り、ミス・ペティグルーの上にながばつとのしかかりました。力強い抱擁に包みこまれま
す。両足が宙に浮き、しつかりとキスをされました。
「こんなに誰かを抱きしめたかったことはこれまでないよ。君ですらね、デリシア。あ
んたが帰ってくるまでここで頑張ってるつもりだったんだ」
ミス・ペティグルーは目を白黒させました。こんな大歓迎をされるわけがさっぱり分
からなかったのです。心配事でもあまりにも胸が一杯でした。といっても、キスが嬉しく
なかったわけではありません。もちろん堪能しています。これまでキスがこんなにか
ら素敵なものとは思ったことはありませんでした。これまでの生活に戻って、もうキス
されることがなかったら、いったいどうすればいいのかしら。喜びにピンク色に上気し
て、両足を地面に下ろしました。気をもむように周りをうろろろしていたミス・ラフォ
ースが二人に微笑みかけました。

「さ、コートを脱がしてあげるわ」とミス・ラフォースが言いました。
「こつちに座って」とマイケル。

暖炉は明るく燃えています。ソファが温かみの届くところに引き寄せられています。コーヒーマットのカップがサイドテーブルに載っていました。心安らく香りが部屋を満たしています。その香りがミス・ペティグールの武装を解こうとします。なんとか無理をして口を開きました。

「あたくし本当に……」と勇気を出して言いかけます。

「コーヒーマグを一杯どうぞ」とマイケル。「一杯、ぜひ飲むべきだ。こんな晩に寒い思いをするのは危険だよ。かちこちになっちゃまう」

コーヒーマグを取り上げました。ミス・ペティグールはいつのまにか湯気の立つカップを手になっています。

「あたしももう一杯いただくわ」とミス・ラフォース。

「俺も」とマイケル。

「お座りなさいよ」とミス・ラフォースはまだ立ったままのミス・ペティグールに言いました。「火の近くにいらっしやい。話すことがいっぱいだよ。いったいこんなに長いことどこにいたの?」

「俺が先だ」とマイケル。「知らないではいられないよ、いったいどうやって……」

電話のベルが鳴りました。

「やあねえ」とミス・ラフォースが立ち上がりました。「こんな時間に！ あたしがまだ寝てないってどうして分かるのかしら」

「君をよく知ってるんだろ?」

ミス・ラフォースは受話器を取り上げました。

「もしもし!……そうよ。どなた?……ええ……もちろんよ。……分かったわ……あんまり早いのは嫌よ。小鳥さんはつかまえておくから。……おやすみなさい」

ミス・ペティグールは立ち上がって、コーヒーマグを置きました。電話のベルはいつだって重大な意味を持っています。何かが起こる予兆なのです。マイケルも立ち上がってカップを置きました。その顔はかすかにこわばっています。あのろくでなしのカルダレッリが最後のあがきをしようというなら、引導を渡してやるぞ。くそつたれめ！ たとえ殺すことになったって。

「なんでもないわ」とミス・ラフォースが軽い口調で言いました。「友達よ」

マイケルは力を抜き、ミス・ペティグールに笑顔を向けました。ミス・ペティグールはちよつと心細げに立ち尽くしたまま、勇気を振り絞って、うまくこの場を失礼するきっかけをつくろうとしています。

「座ってどこにいたのか教えてちょうだいよ」とミス・ラフォースがまた聞きました。「俺が先だって言っただよ」とマイケル。「聞かないではいられないよ。このままじゃ落ち着かない。いったいどうやったんだ? あのひらめきはどこから生まれたんだ?」

尊敬すべきオールドミスのご婦人が礼儀もマナーも全部吹っ飛ばすようなことを引き起こしたんだぞ。俺は昔かたぎじゃないし、形式なんかには構ったことはないが、それでも世間の常識を全部無視して、奴の顎を一発ぶん殴るなんて、思いも寄らなかつた。あそこに突っ立ってて、身動きがとれない豚みたいになつてたのが、あの瞬間、あなたの喝でやるべきことにやつと目が開いたんだ。男なら何ヶ月も前にああしてるべきだったのにな」

「まあ！」とミス・ペティグラーは叫びました。顔が明るくなつていきます。

「教えてくれよ」とマイケル。「どつやつて思いついたのか」

ミス・ペティグラーはちよつとはにかみました。説明するのは簡単です。でもこの人たちが自分をすばらしいと思つていたいなら、そう思つていてもらつのにやぶさかではありません。

「ちゃんと話してくれ」とマイケルがせがみます。

「エセル・M・デルですわ」とミス・ペティグラー。

「へ？」

「なぞなぞね」とミス・ラフォース。

「単純なことですわ」とミス・ペティグラーはつつましく言いました。

「あなたにはね」とミス・ラフォース。「あたしには駄目よ」

「スピーチ」とマイケル。

さあ、ミス・ペティグラーの独壇場です。

「ああ！」とミス・ペティグラーは震える声で言いました。「わけを話せば簡単ですの。これまでほとんど何にも経験しないでできてしまいましたけれど、それでもあたくし、女性の本能というのは持っているんですわ。女の胸の底には、男性を征服したいという欲望が燃えているんです。エセル・M・デルという作家は女性のことをよく分かつています。この人の本に出てくる男性はみんな男の中の男なんです。あたくしも自分と同じ女性のことは分かります。他のことについてはお馬鹿さんですけど、それで、あたくし、あなたも男っぽい方だつてことを思い出したんです。警官を殴つたんでしたわね。あのときニックが飛びあがつて喧嘩になつたら、すべておじやんになつたかもしれませぬ。あの人をやつつけたとしても、たぶんそうなら、しょうけど、だつてあなたのほうが大柄ですものね。とにかくニックがやる気になつたら、こつちがやられちゃつたかもしれませぬ。でもあたくし、ニックはきつと怖気づくと思ひました。そういうタイプに見えますから。賭けでしたけれど、やってみましたの。そしたらうまくいきました。それだけなんですよ」

ミス・ペティグラーは息を切らせて口をつぐみました。

「それだけ」とマイケルがため息をつきました。

「彼女、なんでも知つてるのね」とミス・ラフォースが感に堪えないように言いました。

「なんて女だ！」とマイケル。

「ほんと魔女ね！」とミス・ラフォース。
「敬意を表さなくちゃ」とマイケル。

そしてマイケルはミス・ペティグルーに再びキスしました。真っ赤になり、心からキスを楽しんで、ミス・ペティグルーは嬉しそうに言いました。

「ミス・ラフォースがやきもちをやきますよ」

「ほんとよ」とミス・ラフォース。「でもあなたがあたしから彼をとっちゃっても、強い者が勝つんだってあきらめるしかないわ」

「あなたが間違った男性を選ぶんじゃないかと本当に心配しましたわ」とミス・ペティグルーはほっとしたため息をもらしました。「正しい選択をなさったでしょ？」

「ええ」とミス・ラフォース。

「もちろんさ」とマイケル。

「ああよかった……！」とミス・ペティグルーはささやきました。「ほんとによかったわ」

「座って座って」とマイケルが勝ち誇ったように言いました。「しょぼくなくてないで威張ってくれよ」

「コーヒーが」とミス・ラフォースが氣遣います。「もう冷たくなってるでしょう。新しいのを入れてくるわ。マイケル、手伝って」

マイケルに片目をつぶります。マイケルはミス・ラフォースの後についてキッチンに入っていました。

「電話はジョーからだったの」とミス・ラフォースは聞こえないところでささやきました。

二人は熱いコーヒーを持って戻ってきました。ミス・ペティグルーは暖かい暖炉の前の椅子に座り、手にコーヒーカップを持って、すっかり誓いのことは忘れていました。さあ、いろいろ聞かなくてはなりません。

「それで」とミス・ペティグルーは興奮で目を輝かせながら言いました。

「あたしたち、結婚するの」とミス・ラフォース。

「すぐにね」とマイケル。

そこに座っている二人は、幸せな子供たちのように見えました。ミス・ペティグルーほど二人の幸福に深い関心をよせれば、満たされた思いを感じないではいられません。そうしたおかげで、二人の結婚はたくさんさんの結婚のなかのありふれた一つではなく、特別な意味を持つものになったのです。マイケルは身を乗り出すと、ミス・ペティグルーの手に触りました。ふざけた調子は消えています。

「あなたのおかげだ」とマイケルは低い声で言いました。

「ほんとうによろこびました」とミス・ペティグルーは恥ずかしそうに言いました。

「これで心配は全部消えました」

「わたしも幸せ」とミス・ラフォース。

「それじゃ俺でいいんだね？」とマイケル。
「ええ」

「俺の……その、華々しい気性も気にしない？」マイケルは目をちかちかとさせて聞きました。

「それがいいんですよ」とミス・ペティグルー。

「そのご託言をもうちよつと聞かせてくれよ」

「世の中にはいろんな人があります」とミス・ペティグルーは説明しました。「静かな家庭生活が向いている人もいますし、そうでない人もいます。ミス・ラフォースは向いてませんわ。あなたもね。お二人が一緒になるのはちょうどいいんです。それぞれ違う半分に属している人たちが一緒になると言っただらば、色々な問題が起きてくるんですわ」

「それじゃ、ウエディング・ベルは閉店時間を知らせる鐘だとは思ってないんだね？」とマイケルは元氣よく聞きました。

「あたくしは酔っ払いの心理についてはよく存じません」とミス・ペティグルーはぴしやりといいました。「でも、観察者としては、いろんな結婚を内側から見てきましたわ。結婚して落ち着くという、古めかしい考え方がありますけど」とミス・ペティグルーは慎重に講義を続けます。「それはそれなりに正しいんです。お互いにあった二人が落ち着く分にはね。でもぴつたりの二人が落ち着きなくなかったとしたって、それで二人が合っていないということにはならないんです。この考えが正しいという証拠はどつさりありますわ」

「そのどつさりの証拠のおかげで心のつかえが軽くなったよ」とマイケルは重々しく言いました。

「すごくいい気分」とミス・ラフォース。「お互いに合ってるっていうの」

「俺は落ち着きたくない」とマイケルは言い切りました。

「家庭は死んだわね」ミス・ラフォースが同意しました。

「頭は二つ、思いは一つだ」とマイケル。

「賢い頭だけど、当たり前とは程遠いわ」とミス・ラフォース。

「昔は」とミス・ペティグルーが考え深げに言いました。「それとは反対のことを考えていました。あたくしは落ち着く派でした。それこそが結婚の幸せのいちばんの理想でしたわ。でも今日はずいぶんと勉強いたしました」

「ああ！」とミス・ラフォースがぴんときました。「かすかに我を呼ぶ……オールド・ブラック・ジョー……ね、ジョーと気があったのね」

「ブロムフィールドさんはとてもチャーミングな方ですわ」とミス・ペティグルーは控えめに言いました。

「あの人は落ち着く派とは言えないわよ」

「違いますわね」

「でも好きなんでしょう」

「あたくしたち、好みが似通ってるよかったですわ」とミス・ペティグルーは用心深く言いました。

「ちょっと聞いたか！」とマイケル。「いったいどんな魔法をつかったんだ？　好みが似通ってるって！　エジプトのハーレムでドンちゃん騒ぎをすることが？　いったいジョーに何をしたんだ？」

「これは聞かなくちゃ」とミス・ラフォースが興味しんしんで言いました。「あたしの大事なお友達のジョーにいったいどんな黒魔術を使ったのか、知らないではいられないわ」

「そうだ、お嬢さん」とマイケル。「どついつことだよ。あつかましくも何の言い訳もなく四五分も遅れて帰ってきたんだぞ。向こうを出たのはみんな一緒なのに」

ミス・ペティグルーは顔を赤らめ、少し後ろめたそうにしました。

「分かった」とミス・ラフォースは弾んだ声で言いました。「キスされたんだわ」

「しなかったとしたら馬鹿者だ」とマイケル。

ミス・ペティグルーの顔を見れば一目瞭然です。

「やっぱり」とミス・ラフォースが勝ち誇ります。「いたずらっ子さん。あんなにあたしにお説教したくせに。かわいそうなジョーをひっかけたのね。彼があなたの魅力に勝てるわけがないわ」

「捨てられた女たち」とマイケルが首を振りしました。

ミス・ペティグルーは慌ててほころびた威厳のきれっぱしを寄せ集めます。

「違うんですよ」とミス・ペティグルーは真剣に言いました。「よかれと思ってそうしたんですわ。フロムフィールドさんが、お二人は一緒になったばかりだから、少しの間、邪魔が入ってほしくないだろうっておっしゃったんですの。あなた方が……その、落ち着くまで少しドライブしようって言うてくださったんです」

マイケルがにやりとしました。

「さすがジョーだな。次に会ったとき、一杯おごらなきゃ」

「そんなの信じないわ」とミス・ラフォース。「あなたが彼に色目を使って、彼、拒めなかったのよ」

突然、ミス・ペティグルーは悪戯っぽい、ちょっとお茶目な顔をしてくすくす笑い出しました。男性のことだからかわれるなんて！　なんておかしいのでしょうか。

「やっぱりね」ミス・ラフォースが繰り返しました。「それで、どんなひどいことになったの？」

「白状しますわ」とミス・ペティグルーは後ろめたい喜びを感じながら言いました。「フロムフィールドさんはタクシーの中であたくしに腕を回しましたわ。とっても寒くて、あたくしが風邪をひかないようにって」

「まあ！　やだ！」とミス・ラフォースが叫びました。「なんて言い訳！　そんな言い

訳！」

ミス・ペティグルーはたとえミス・ラフォースとマイケルにでも、ジョーのキスのことを話すことはできないと思いました。あれはふたりだけの秘密です。あまりにも大切で、一番親しい友達にだってぺらぺら話すことではありません。

「もう、このじれつたいスフィンクスつたら！」とミス・ラフォースがわめきました。「キスされたんでしょ。ほら、正直に言って」

「そうですね」とミス・ペティグルーはしぶしぶと言いました。「おやすみのキスをしてくださいましたわ。そついつのはあなた方……そのボヘミアンな傾向のある方々の習慣なんですから」

マイケルとミス・ラフォースは吹きだしました。

「ボヘミアンガール！」ミス・ラフォースが大喜びで言いました。「昔からスペインではこうしたものよ」

「ブドウ酒のお菓子で私を養って！」とマイケルがため息をつきます。「おい牡蠣が口を閉じたぞ。唇が閉じてる」

「あきらめないわ」とミス・ラフォースがむせめます。「缶切りを持ってきて」

ミス・ラフォースがミス・ペティグルーをからかいます。マイケルもミス・ペティグルーをからかいます。ミス・ペティグルーはますますピンク色になり、笑顔が広がっていきます。出て行くことなど頭からすっかり消えていました。時計はひっそりと時を刻みます。

「えらい時間だ！」とついにマイケルが言いました。「もう行くよ」

その言葉はミス・ペティグルーの耳に運命の鐘のように鳴り響きました。急に思い出しました。慌てて立ち上がりました。

「まあ大変！ あたくしも時間のことを忘れてましたわ。あたくしもおいとまします。急がなくなっちゃ。まあ、ほんとすっかり忘れてしまっつて。すぐ着替えますから。今すぐ」

「何言ってるの」とミス・ラフォース。「今晚、泊まっていくのに決まってるじゃない」ミス・ペティグルーは誘惑と戦いました。椅子の背をつかんで身体を支えます。二三秒の間、口を利くことができませんでした。深く、震える息を吸い込みました。

「ありがとございます」とミス・ペティグルーはようやく言いました。「本当に親切にしてくださいましたわ。でも行かなければなりませんの。今日は、二人でとても楽しい一日を過ごしましたわね。でも明日はまた違う一日なんですよ。これ以上ご親切に甘えるわけにはいきませんの。それに今日のこの日が……がっかりして終わるようなことになったら悲しすぎますわ」

「でも」とミス・ラフォース。「あなたをすっかりあてにしていたのに！ こんな困っているときにあたしを置いていくななんてそんな不親切だと思わなかったわ」

「困ってる？」とミス・ペティグルーはびっくりして聞きました。

「あんたが泊まらないんなら、俺が泊まらなくちゃならない」とマイケル。「それだけのことだ。もちろん、思い切った手だし、デリシアのために人に知られないようにしなきゃならんが、それしかないからな」

「そうよ」とミス・ラフォースがきっぱりといました。「一人で置いていかれるなんてだめ。ニックがいつ現れるか分からないもの。一人でいるのは怖いわ」

ミス・ペティグルーは二人の顔を見比べました。二人ともとても真剣で、少しがめるような表情をしています。突然、ニックが鍵を持っていることを思い出しました。マイケルは知っているのかしら？ 知っては困ります。ミス・ラフォースが神経質になっているのも合点がきました。

「本当にあたくしが必要なんでしたらー！」と口ごもります。「お邪魔するつもりはありませんの……でも本当にいたほうがよろしいんですか？」

「泊まってくれるのね」とミス・ラフォースが声をあげます。「きつとそうしてくれると思っただわ」

「心から感謝するよ」とマイケル。「デリシアの評判を落とすたくないからね。でもそうしなきゃならないところだった。彼女が困るのは嫌なんだ」

「もちろんですわ」とミス・ペティグルーがいかめしく言いました。「そんなことを認めるわけには参りません。本当にそうしてほしいとおっしゃるなら、ここに泊まりますわ」

マイケルは何も知らないとしても、ミス・ラフォースの評判は十分とっていいほど傷ついているわ、とミス・ペティグルーは思いました。ここらが分別のある女性の出番です。それにミス・ラフォースが本当に泊まってほしいと思っっているなんて、ほとんど奇跡のようでした。物事というのは朝になると明るく見えてくるものです。勇気を新たに、仕事を探しに出て行けるでしょう。今晚を外で過ごさなければならぬことに自分がこんなに怯えていたなんて、そうしなくてよくなるまで気がついていませんでした。安心感の波に満たされ、力が抜けてしまいました。

「それで決まりだ」とマイケル。「あんたは当てるにできるって言ったんだよ。帽子はどこかな？ コートは？ 俺の恋人は？ おやすみ、ダーリン！ ボヘミアンなどころを見せしてくれ」

「コートを」とミス・ペティグルーが息をのみました。「寝室。持って行きますわね」そしてミス・ラフォースの毛皮のコートをひつつかむと、あわてて寝室に引っ込みました。しんとした間があります。ドアがバンと開きました。

「警報解除」とミス・ラフォースが呼びかけます。「出てきても大丈夫よ。レディがシヨックを受けるものはないわ」